

鮎の宿



阿川弘之

鮎の宿

昭和五十年十二月八日初版発行

著者・阿川弘之

発行者・賀来壽一

発行所・株式会社六興出版

東京都文京区水道二―九―二郵便番号一一二

電話・東京(九四三)三四三一

振替口座・東京一―九二四四八

印刷・図書印刷

製本・手塚製本

©1975 Hiroyuki Agawa

0095—04601—9216

●乱丁・落丁本はお取りかえいたします。

●定価は帯・函に表示してあります。

鮎 の 宿

目次

終焉の記	10
葬送の記	19
志賀直哉の意地悪	38
志賀直哉と川端康成	44
直哉のタスキ	49
古手紙の山の中から	52
メートル法強制	56
猫なで聲	60
十萬圓の古本	62
書評	
井伏鱒二著「小黑坂の猪」	65
尾崎一雄著「四角な机・丸い机」	66
蛙の合唱	68
私の中の日本人	73
萬葉集と私	80
京都の萬葉學者と私	84

煙草と私	88
酵母の缺乏	95
ノーベル賞の重さ	101
三島由紀夫の思ひ出	103
一編集者の死	109
百閒讃	116
獅子文六	119
「寒雲」と私	137
モーレツ爺さん	143
末つ子命名記	146
奇人狐狸庵	151
書は禍のもと	158
習字のけいこ	161
酒中日記	167
土佐日記	171
戦後犯罪人	175

死にたくなる	177
フレキシブルワイヤ	179
二隻の空母	183
親日家	185
をかした國の物語	187
トイレ考	189
不思議な木鐸	191
私の好きな言葉	195
湖北慕情	196
蔣介石の死	200
床屋政談	202
ウォール街の新聞賣り	205
モスコーの自由市場	207
柳はみどり	210
四季の味	212
アメリカの美味と不味	214

評判のいいビフテキ料理

242

わが美味禮讃

245

しめぢ飯

279

人を食つた話

281

遊び

283

ほんの少し人を幸福にすること

287

娘教育

298

のむかのまぬか

303

コレット

305

最後のコックピット

307

大西洋の船の旅

310

ハワイの休日

313

室生寺ふたたび

319

鮎の宿

329

初出一覧

卷末

●
ブ
ツ
ク
デ
ザ
イ
ン
・
蟹
江
征
治

鮎 の 宿

終焉の記

昨年夏、前立腺肥大の手術を受けて以來、元氣が無くなり、自宅で寝たり起きたりの暮しをしてをられた志賀直哉先生が、軽い肺炎の症状をおこし、嫌つてゐた入院を承知して世田谷の關東中央病院に入つたのが、去る八月十六日であつた。容態は思はしくなく、食物が全く咽を通らず、十八日十九日あたりは終日ほとんどとうとうと眠つたままで、もはや昏睡に近い状態かと思え、私は覺悟を定める思ひになつた。

ところが、一週間ほどするうち、先生は不思議に少し持ち直して來た。醫師の話では肺炎の徴候は完全に消失したといふことで、朝夕半熟卵一つ程度だが物も食べられるやうになり、周りの者は、「やはり心がよつぽど強いらしいね」などと言ひ合つた。

さうなるとしかし、先生の方は段々持ち前の我儘が出て來て、床の上へ起せとか、ステツキを突いてベッドから足を下ろすとか言ひ出す。すぐ疲れて横になつてしまはれるけれども、五分もしないうちにまた起せと言ふ。康子夫人がさとすやうな口調で、寝ていらつしやらなくちや駄目よと、やさしくなだめるのに、大きな強い聲で、

「うるさいッ」と怒鳴つたりした。

私はそれまで、氣が張つてゐたためかもうあきらめてゐたせゐか、家人に、

「あなた、割に平氣なのね」といや味を言はれるくらの平氣だつたが、此の光景を見、四女の萬龜子さんに、

「俺は病氣をなほすからネ」と言はれたといふことを聞き、これはもう一度恢復されて御一緒に何處かへちよつと遊びに行けるやうな日が来るかも知れないぞと思つた途端、涙があふれて來た。

志賀門下で作家となつた人たちも、瀧井さん、尾崎さん、網野さん、みんなもう七十で、網野さんはよく病院に來て夫人の身の廻りなど心を配つてをられたが、瀧井さん尾崎さんは住まひも遠い。藤枝靜男さんも濱松で遠い。結局家が割に病院から近い一番末輩の私が、病室につめて、何となく連絡係のやうなかたちになつてゐた。

其の日、小田原の尾崎一雄さんから、

「どうですか？」と電話がかかつて來たので、

「大丈夫です。けふはこれこれで、つひに『うるさいッ』と來ました」と言ふと、尾崎さんは、

「はあ。いよいよ來ましたか」と、何ともいへぬ嬉しさうな聲を出した。

だが其の後、病狀は一進一退といふより、やはり徐々に下り坂に向つて行つた。

食物も再び咽を通らなくなり、一度「京味」の刺身と里芋の煮つけが食つてみたいと言ひ出されたことがあつたが、取り寄せた時には「もういやだ」と、一と口も手をつけなかつた。

鼻の穴から管を深くさしこんで、何といふ榮養劑か、流しこむ試みも一度だけ成功したが、「いやだ」と言はれてそれも取つてしまつた。

水分と榮養との補給は、連日長時間の點滴だけに頼つてゐた。

元氣なころ、先生は「不老長壽といふ、不老で長壽ならいいが、老いだけ残つての長生きはいやだね」と言ひ、よく安樂死のことを口にされた。息子の直吉君は、

「ほんたう言へば、かうやつて無理に生かしとくのは可哀さうな氣もするんだけどね。あれだけ言つておいたのに直吉は未だ分つてないつて、親爺怒つてるかも知れないよ」と言つたりした。

それでも九月の中旬までは、顔をのぞきこめば、私であることが分つて下さり、入齒をはづしてゐるので發音は不明瞭だが、

「失敬」とか、

「あ、ありがたう」とか言はれた。

そのうちしかし、次第にそれも怪しくなつて來た。病室へ入つた私を見て、

「あの男は誰だ？」と、夫人に訊ねたりされるやうになつた。

胸元をひらくと、骨太の骨だけがあらはに見えて、胃のあたりは痛ましいほど落ちくぼんでゐた。

長雨つづきの秋で、十月の中ごろ私は雨の中を歩いて風邪をひきこんだ。末娘の安場貴美子さんに電話し、

「うつしては悪いから、なほるまで暫く遠慮しますが、どんな具合ですか？」と聞くと、

「それが、きのふは珍しく、お粥を少しと、小さく切つたお刺身ですけど、お刺身食べたりにして」といふことで、一と安心してゐたら、十九日の朝、寝てゐるところを電話で起された。

昨夜から呼吸が少しをかしくなり、けさ醫師の話ではまあ今夜が山だらうといふ。風邪どころではなく、すぐ

病院へかけつけると、先生は酸素吸入のマスクをかぶせられ、「ハ、ハ、ハ」と、口をひらいて早い苦しげな息づかひをしてゐた。兩眼はあいてゐるが、視點はもはやうつろであつた。

知らすべきところには知らせようといふことになり、夕刻までには瀧井さん、尾崎さん、網野さん、藤枝さん、奈良の上司海雲さん、皆顔が揃ひ、三女の壽々子さんも蘆屋から着き、身内の人たちも揃つた。

報道關係に知れたので、各社の記者が大勢病院につめかけて來た。かういふ時文化部學藝部の記者は皆心得てゐて、取材するにも控へ目で丁寧だが、一部社會部記者の中には、志賀直哉の經歷、作風、作品、何もうくに知らず、ただ厚かましくて強引で無禮極る態度の者がゐた。腹が立つた。

先生はしかし、やはり芯が強いとみえて、山と言はれた其の晩をどうやら越しさうであつた。様子を見て、夜半には私も一旦家へ歸つた。

明治四十五年の「母の死と新しい母」といふ先生の作品に、生母銀の亡くなる場面で、

「汐の干く時と一緒に逝くものだ」と話して居た。それを聴くと私は最初に母の寝て居た部屋へ馳けて行つて獨りで寝ころんで泣いた。

書生が慰めに入つて來た。それに、

『何時なんじから干くのだ?』ときいた。書生は、

『もう一時間程で干きになります』と答へた。

母はもう一時間で死ぬのかと思つた」

といふ一節がある。それを思ひ出して潮を調べてみると、其の夜の干潮が十一時いくら、二十日の朝の干潮が

十一時三十何分かであつた。科學的にどの程度根據のあることか知らないが、二十日のひる前が危いのではないかと、私は思つた。

一二の新聞の十九日付夕刊に「志賀直哉氏重態」の記事が出たらしく、テレビのニュースにも出たさうで、翌二十日は、朝から大勢の人が次から次へと見舞ひに見えた。

特殊な關係の方以外は、病室へ入つてもらふことを御遠慮願つたが、思ひがけず里見弴氏も姿を見せられた。里見さんも元氣とはいへ、すでに八十である。八月に、志賀先生の入院をお知らせした時、里見さんは康子夫人にあてて、「見舞ひには行かないが、僕の氣持は分つて下さると思ふ」といふ意味の長い手紙をよこしてをられた。初めての、ぢかのお見舞ひであつた。

里見さんは部屋に入るなり、つかつかと枕元に近づいて、

「伊吾だよ」と言つた。

「伊吾」はペンネームといふか、白樺の人たちが若かつた時代の、里見さんに對する呼び名である。志賀先生は「伊吾」の來てゐることが分つたやうであつた。

酸素マスクの下で、荒い息をしながらしきりに何か口を動かしはじめた。何を言つてをられるか、全然聞き取れないのだが、里見さんがかみこみ、先生の額に片手をあて、もう一方の手で先生の手を握つて、

「うん、うん、うん。さうかさうか。うん、うん、うん」と、幾度も幾度も繰返した。

やがてベッドのそばを離れて、私を呼ぶと、

「生馬が聞いてシヨックを受けてね。連れて行つてくれと言ふんだが、志賀君の方でもシヨックを受けると困る